

瀧井孝作ノオト (三)

唐 井 清 六

「ツチグモ」の後半の号からは俳句関係のエッセイを三篇とりあげてみる。「飛驒學寮より」は「孝作」、「直接」といふこと」「直接といふ事(再び)」は「折柴」の署名である。

飛驒學寮より

こゝへ移つたのをお報らせ旁々、その移つた日が暮れてから、私は根岸の先生の許へ行つた。私は其處で先生に、今迄ついぞ言つた事はなかつたのだが、其晩はどうした譯か、出來た俳句に就て或は繪とか彫刻とか書とかいふ具體的なものゝ一々に就てのそれでなくして、藝術の形而上的な方面の話を其處へ持出した。尤もそれ以前、この正月になつて久しぶりで逢つた一人の友と、自分等の藝術上の意見を披瀝して、私自身の抱くものに稍確信を得たやうな心持もあつたからである。臃ろげにさう考へてゐた事を、口に出して云つて、はつきりしたといふ心持もあつたからである。其處で話題に上つた話は「自然性」(私はさういふ言葉を使った)であつた。要するに本質上の話ではあつたが、先生なり私なり、其處に二人はお互の心持がわかつてゐての上であるから、さうした抽象的な話もお互の心には通じたのであつた。(私は此文章で私の「自然性」を説くつもりではない、まだ私は多くの人にわか

らせるまでそれを説く言葉をまだ知らないからそれは今やめる。) 其晩根岸で私は大きな火鉢の縁をしつかり握みながら、熱してそうした話しをつづけてゐた。

先生のお宅を辭したのは、いつものやうに遅くなつてからであつた。今迄雜司ヶ谷に住んでゐた頃は、山の手線の大きな明るい電車で往復してゐたのであるがこの夜からは夜更けの市内電車に乗るのである。私は阪本の通りへ出で、あたりはもう寢靜まつた中に一人電車を待つて居た。その私の頭の中は今晚あんな話をして來たといふ事からか、いつもと些し異つてゐるやうに思はれた。其時私は胸の底からこんな事を思はれるやうになつて了た。「私達が一生懸命になつて俳句を作る、また藝術の問題を話し合ふ。それが奈何にも、あはれにまたいとほしく思はれる。」と……。

頭を抱へてつツ俯して、何物かに訴へるやうにまた希ふやうに、一生懸命に俳句を考へてゐる姿が眼に泛ぶ。私は「おゝゝ」とすがりつきたいやうな心持になる、併しその姿は誰れでもない自分である。……小さな自分がほんたうに訴へてゐる、希つてゐる、また求めてゐる。——私は私自身ローマンチックに思はれてならない。

私の頭の上には非常にくく廣いくく空がある。どこから來てどこへ行くといふ事のわからない私の生命は、始めもなく終りもない永遠の流れの中に懸かつてゐる。私は私自身ローマンチックなものと思ふ事によつて、高いくく高い所に悠久に流れてゐる永遠といふ「氣」に觸れたと思はれるのである。(私は實際こんな言葉を使いたくない、けれども何うして、この心持を現はして好いかその言葉をまだ知らない。)

それからこつち私は「心の自由」といふ事の確信を得た。ある時一人の友が來て、くらしの事を話して行つた。私はこんな事も其處で云うて居た。

「なァ、さうじやありませんか。私達の生活がこれだけのもの(二つの指を大きく開いて)なれば、パンの事は

そのうちのコレだけなのです。(二指は狭まる)それに廣いものを狭い方へもつてくるのは當てはまらない事です。」
 メシの事や家の事ばかりが生活だと思つてゐる人達がある、實生活だと云うてあくせくとしてゐる人達がある。
 (あつても私には差支へるわけではないが) 私はいつもさう思ふ。「何故もつと悠々とした心になれるのか」と。
 私は、ほんたうに悠々とした心になれば、路傍に行倒れになつても醜くはないと思ふ。それも自然だから。

この頃しきりにさう思はれる。それは明けたから最早一昨年になるが、四月の末に一度國へ歸つたときの事である。鋤雲亭でのいろ／＼の話のうちに岡村香雨氏の事も出た。その時鋤雲翁がその人の辭世などの話もされたが「……安心して逝かれた……」の一句を聞いて私は、卒然と私の心の構えを直さねばならぬやうな氣がした。死者のみよりの者が「安心してナー」といふやうな習俗的な意味ではない、鋤雲翁の言葉としてゝも私には響いてくるものがある。その時分やはり私もさまざまな考へはあつたものゝ、此の直接な死の事までには思い到つて居らなかつた。私がこの時「安心して」に強い何物かを感じたのは、自分の目の前にありながら見る事の出来なかつた死、死だけでは抽象的であるが、實際それに對して安心を得るまで覺悟された人の心持、それがまぎ／＼とワカツたからである。ワカツたのはその人を自分は知つてゐたからでもある。私はその折の紀行(層雲誌上にのせた)にこんな事を書いて置いた。

—私は今年の春早く暖い南國の堺の大濱に避寒されてゐる岡村香雨氏に遇つて、小じんまりとした家の明るい障子が徐ろに暮れて行つて蔭が下ろされる頃まで話してゐた。河内や和泉の山陵巡りをされた話だの、和歌の浦の淺き春の霞を描かれた氣品のあるスケッチなども見た。其時の私達の背景には紺青を湛へた潮が圍ぐつてゐた。お恙がとく癒へて早く歸村されるやうにと、香雨氏の人格を敬慕してゐるみんなは希つてゐる。それにもかゝらず病魔は、旅の氏を更らに歸らぬ旅に誘つてしまつた。そして私が恰も高山に居る時、太陽が赤いと人が云ひ出した日、

此處で葬儀が営まれたのである。それから二日後に此の村を通る、私が先き程追分の茶店に休んだ時にも、其處の人々は此の亡くなられた大旦那の徳を語り合つてゐた。――

老人の何十年かの永い生涯のたつた一日それも僅か二三時間の面晤にも私は或る感銘を覚えてゐる。不治の病、もう髪の水の白くなつた、そして死、其處に同じ年頃の老人が附添いとして一所に暮して居られた。今から想ふと、何か斯う枯林に日の當つたやうな色と味ひがある。心のやすらかな、この悠々とした老人達！

むかし、芭蕉に幾人も弟子があつた、芭蕉のまはりにいろ／＼の人が集つた、それを此頃或る友が来て「芭蕉が偉大だつたからだ」といふた、斯う判断するのがあたりまえだと云つた。

私には別な考へがある。「芭蕉の許へその十哲だとかまた色々の人の集つたのは、集つたゞけである。集つた、ただそれだけである。」

學校を休んで、一月二十五日

龍眠會のある日だ、墨を磨つてあるからと

行つて私はこの書を書いて貰つて來た

海紅の表紙まつかな地に

「雷鳥」が濃く出でゐる、日本アルプス吟

居間の白壁に不敢取

ピンで止めて

顔を揚げては眺める

また讀む、頭の中で

「雷鳥の雛

掌にす

うとくと眠る哉」(「ツチグモ」第十二号・大正五年二月)

直接といふこと

「直接的表現」の「直接」といふ事を吟味して見たい。

「直接」とは、態度のことで、何等の私情或は目的をさしはさまず、ありのまま(客觀傍觀にあらず)、事物を分析せず具體物を具體的に、論理的抽象過程を経ず、ものにむかつて隙きのない場合を云ふのである。

何かの場合に、是は適切だ觸れてゐると云はれる事がある。それは其の出來事が直接に行つたからで、適切といふのと直接といふのは、出來たものは同じであるが、「適切」は批評的判斷で結果を指し、「直接」は自覺的に過程を云ふたのである。

この「直接」といふ事だけをそのまま説明する事は難しい。これは直接である、と感じたときはその直接であるものと同一線上に心が達してゐなければならず又、これは直接にあらず、と感ずるにはより以上に直接なものを心に持つて居なければならぬ。

どこまで直接でどこまで非直接だといふ事は別としても、直接感といふものは、その人々個々によつて異なる。この異なるのは普通人の弱點で、個人々々の生ひ立ち、あとづけられたる習慣性が異なるからである。

直接感、直接の見分けは、人々によつて異なり、難しいのであるが、直接といふ事の根本的なものに於ては、其直接性は如何なる場合にても同一なのである。

直接といふ事を説明する爲めに暗示的ではあるが俳句を例にあげるといふと思ふ。併しこれも俳句がわからねば何にもならないのであるが、俳句のわかるといふ事は、其場合の直接感が或る線上に達してゐる事で、相手に直接感のあると云ふ、それに基づいて説くのである。

靈棚の奥なつかしや親の顔 去來

面影のおぼろにゆかし魂祭 (原句)

面影と云ひ、おぼろと云ひ、更らにゆかしと云ふ、讀後の感じは誠にぼんやりしたものであつて、散漫弛緩、意識の緊張を缺くよそ／＼しさがある。靈棚の奥と突込んで行つた直接なるに遠く及ばないのである。斯うした例は現今の俳句の場合にも見受ける。

冬日照る洞のそこひ墓所の原 六花

冬日しむ洞のそこひ墓所の原 (原句)

「照る」の方が大きいといふ評があつた、「しむ」といふのはあまりに私情的な心持であるから。

魚をつく寒風の上ワ水白ろき 一碧樓

魚をつく寒風の上ワ水白ろに (原句)

下の「に」はあとへ引き返すやうな感じになつていけない、出來すぎてゐるといふ點がある。「水白ろき」とした方がいゝ。といふ評があつた。出來すぎてゐるといふ技巧の目につくのは、尠くとも其處に表現せようといふ目的が含まれてゐるのである。

窓の日に燕の巢臺を打てり 折柴

窓の圓日に燕の巢臺を打てり (原句)

「圓日」は、まろいなど日の容ちをあらはさなくともいゝ、此句では「打てり」が響いてくれればいゝのだから。

といふ評があつた。たしかに、圓いなど、云つたのは分析的に頭が働いてゐた、全的ではなかつたのである。

種伏せし畑馬の影過ぐ 櫻碗子

種伏せし畑馬の影よろくと過ぐ(原句)

「よろく」は無い方がいゝ、趣向が見えるから。といふ評があつた。趣向といふ事は頭の中に豫め論理的過程のある事で、此兩句の場合を見ると、前者が如何に自然に透徹してゐるかといふ事が解かるのである。

さて如上の句をもととして尙「直接」といふ事を究めて見たい。

「面影の」、「冬日しむ」の感傷的なる。「上ワ水白ろに」の微温的なる。「圓日」の興味的なる。「よろくと過ぐ」の詮鑿的なる。いづれもいけないとすれば、この直接であるとした方の句は如何。

靈棚の奥なつかしや親の顔 去來

冬日照る洞のそこひ墓所の原 六花

魚をつく寒風の上ワ水白ろき 一碧樓

窓の日に燕の巢臺を打てり 折柴

種伏せし畑馬の影過ぐ 櫻碗子

讀過後第一に胸にくるものは、嚴肅感、どうする事も出来ない、人の細工で動かすべからざる、自ら襟を正したくなるやうな心持である。

この嚴肅感は、直接なる生一本な他を顧みない態度が、それと持來したので、俳句の發生の経路の上に、直接といふ事が大いに役立つてゐる事がわかる。併しそれよりも茲で問題にせよとするのは、嚴肅だと感じられる事そのことが、感ずる人の態度も、感じられる俳句について「直接」であるからだ、といふ事である。

例へて見ると、——靈棚、奥、親、顔、——冬日、洞、墓所、原、等單なる文字の羅列と見るのは、客觀傍觀の

態度で、それはよそ／＼しい、其れと同じく「靈棚の奥なつかしや親の顔」も、単なる文字の羅列としか見られない時は、態度が直接ならずと云へるので、換言すれば、「靈棚の奥なつかしや親の顔」に何物かを感じられるのは、此句の含む、持つて居るものに、直接に觸れてゐるからである。

此點で俳句を見る態度にも「直接」が重要だと言へる。

さればこの「直接」を、如何にすれば自分自身が體現できるか、といふ問題が起る。

「直接」になるには一種の修養が必要であるが、吾々は手近かに俳句を持つてゐる。で、それに就て考へる事が出来る。

一度び眞の俳句によつて「直接」の實證を得れば、既に其場合は直接になつてゐるので、それをもととして、自身で俳句にたづさはり行くうちに、自然と直接になるやうに慣らされてくるのである。これは、はじめ自分等が總べてに直接になり得る可能性を持つてゐたのが、後天的だん／＼に失はれて來つたそれを、更らに反對に、失はるゝ事を失つて、元のまゝの總べてに直接になり得る可能性を生かしてくるのである。而してそれが自然と、俳句をつくり俳句を味はいつゝあるうちに、自身の素質によつて、自身が「直接」になり得その「直接」が餘程しかりしたものとなつてくるのである。

扱て、直接によつて俳句が得られ、直接によつて俳句が解かり、俳句をつくり俳句が解かる事から自身が直接になり得るといふ事は、以上述べて來た如くであるが、更らに彼等の句が自然性を具備してをり、それなり一つの自然だと見られるならば、此の「直接」の考察に、尙一步を深く踏み得るのである。

「直接」の究竟は、びつたりと一つになること、物心一如の境で、自分の心が他のものになりきる他のものが自分の心になりきることである。さればその「直接」なるものゝあらはれとして俳句が存在するとすれば、俳句のみに就て考へても充分「直接」の何たるやは了解し得るのである。

俳句の力強いといふ事は力強い直接からきてゐるのである。即ち、力強い「直接」、それを砕いて云へば、確かり掴み掴まれてゐるかたちで、それなりで安定に尙發展しようとする勢を示してゐる。「直接」は決して靜止のさまではない。直接性には、ゆるぎのない、恐ろしい程の執着があるが、直接になり得たものには解脱のさまも見る事が出来るのである。かうしたことは俳句を見て感ずるのであつて、要するに俳句の生きて居るさまなのである。

そこで俳句の生きて居るといふ事は、作者自身直接の俳句なれば、やはり作者自身の生きてゐる事に他ならない。作者自身が生きて居るから俳句が生きて居り「直接」によつて出来、「直接」によつてわかる俳句だから、俳句それを全く自身だと云へるのである。

こゝまでくると、直接の効果、即ち俳句にあらはれたものを見ると、その具象的なる、原始的なる、眞實なるすがたが、全く俳句よりもその人にあるのだといふ事になる。さればこの人が俳句を作る上に於て、斯程までに「直接」になり得るなれば、奈何なる場合にても「直接」になり得るといふ事は、斷言される。さうすると其の人のすがたに原始的なる眞實なるものがいつもあらはれてゐる事になる。

而して凡べてのものも生々潑冽として眼に見えてくる、それは自分自身が全く「直接」になり得たからである。といふ結論に達するのである。〔ツチグモ〕第十三号・大正五年五月)

直接といふ事(再び)

直接といふ事は、何に向つて直接なのかといふ疑問が起る。それについて考へて見たいと思ふ。

世の中に型といふものがある。能樂の型、舞踊の型、さては游泳の型などの型である。單に形式としての型とは異なる。動くものゝ事を型だといったその型である。これではなくばどうする事も出来ない其處までに至つた型である。

私は私の近い経験の内、七月中北條の海で游泳を教はつた、その事から考へをすゝめる。泳ぎはその名によつていろ／＼の型がある、型は手足の動かし方で、泳ぎ方の色々、各々幾分づゝ動作に異なる所があるが、目的は孰れも水に溺れない點にある。はじめに奈何にすれば水に溺れないか、即水中にあつても自分を活かさうといふ要求、其處を出發點として研究し、修練を積んで、結果が一つの泳ぎの型となつた。泳ぎの型は、それを編み出し組立てた人の心持から謂へば、是れで大丈夫だといふ自信のかたまりであり、その自信を感じる上に於ては、救はれた自己の姿である。またそれが型として存在する上からは、大きな保證のついて居る確かさの顯れでなければならぬ。游泳術にそれだけの意義を認める私は、その型をおろそかにはしなかつた。扱て最初にその型（むしろ此處では形式）を一通り覚えて水へ這入つた。併し手足を斯う動かさうあゝせうといふ意識はあつても、はじめの程は水中で中々思ふやうにならないものである。からだは單に浮く、輕さを覺えるその事すらむつかしいものである。が、それが次第に水になれてくるに隨ひ、水の中で泳ぐといふ事に一生懸命になるにつれて、身體が不思議に浮き手足がほゞ動かせるやうになる。（是は手足を動かすから身が浮くのか、身が軽くなるから手足が動かせるのかそれはどちらとも云へないが）水の中で自由がきく様になればこんどはそれにつれて型を調へるのである。水と身體との微妙な感觸がうれしくあたまたに沁み込む、足の一と煽りも寔にうまく行つた、こゝだと思ふ時それは一種の解脱したやうな心持になる。一階段を上つた心的状態である、前の世界から違つた世界へ移つた心持である。此の一擧手一投足の會得が積まれて、泳ぎは手に入つたものとなるのである。何にしても一歩まごつけば溺れるといふ生死の問題が懸つてゐる、だから一生懸命にならずには居られない、斯くして泳ぎの型は自分のものとなるのである。されば泳ぎの型といふもそれを爲活かすには自己の修練の結果であつて、型も畢竟は自己のものだと云はねばならぬ。

能樂の型は自分で演つた事が無いので實際の觀察は出来ないかも知れぬが、觀衆の一人として度々觀る機會を持

つたから、自分の直覺を疑はない限り其感想を述べる事は不可能でない。第一に私に訴へてくるものは暗示そのものである。私はあの舞臺の上にはあらはれる型を見て、吾々が日常氣付かなかつた吾々自身の動作、割合に無關心であつた自分の動作が、力強く心附かれる事である。ア、さうかとふり返られるやうな心持である。能をじつと見てみると、見てゐるそれなりで自分の頭腦は恐ろしい勢を以て自己の生活形態の上に意識を奔らせられるのである。シテワキの姿整や格好が不思議な力をあらはして頭に入るそれが筋つけて自己の姿を喚び起すのである。之は一種の驚異である、未知の世界の發見である。心理的に謂へば、能の型、演ぜられる格好の印象が、自己反省の動機をもたらししたのである。併し十人が十人も能を見て斯うだとは云へないかも知れない、私自身の心の方向がその時自己反省に向つて居たから、能の型を見て自分の動作が考へられたのであらう。けれども斯ういふ斷案は下せる。能そのものゝ型が尠くとも形の上に徹つたものであつたから自分の知らなんだものを暗示されたのである。其處で形の徹つてゐるといふ事は不純なものゝ無い謂で、能の型はそのまゝ恐ろしく篩ひ上げられた清淨精そのものではなからうか。さりながら此能が下人の手によつて演ぜられ、ば、緩漫な氣のぬけた退屈なものとなる。これはまだ眞に型が擱まつてゐない、自分のものとなつてゐない證左であつて、此處でも型は終極に存在する事が考へられるのである。

踊りの型、それはよくきく詞であるが、私の考へではこれも型に始まるのではなくして型は終極のものではないかと思ふ。或る芝居好きな友達が來て、六代目の踊りは素的だと言ふ、どう素的なのかと訊くと、先代が斯う踊つたとか誰れがあゝの型でやつたなど、といふ形式美の方から見るとではないが、踊りの一舉一動に些とも隙がない、どんな場合でもそれは浮いて居ないからだがよく著いて居る、といふ。私は菊五郎の踊りなるものを見た事はないが、今假りにその男の言を信用して考へて見る。(踊りを些とも見ずして踊の事を云々するのはをかしいやうだがこれは私自身の心持を述べる材料に單に持出ただけだから踊りそのものに關する事ではない)此の一舉一動に隙

のないといふ事は、緊張してゐる即力のある事で、此論の立場からいふと型を爲活してゐるのである。どんな場合でもよくつくといふのは、その人の身體のうごきがそれなりで型になつてゐる事である、一つの手をあゝ擧げたといふのが即型になるのである。何でもない身のこなしでも直ぐ型になる程突抜けてゐる藝だといふのである。茲に至ると型を豫定して型が出来上るのではなくして、一つの型の創造か或は未知の型の発見か、発見ならば自然の中に型がある譯で、それとも自然そのものが大きな型なのかも知れない。

普通に型と云ふ詞でいはれてゐるものでなく、私は游泳などに稍似てゐる柔術、擊劍、弓術など、それを會得するといふ事は活きた型を擱んで自分のものとしたのではないかと思ふ。

私は、身體の運動になるから大弓をやつて見てはどうかと勧められて、弓を手にした事がある。其時髯の長い老人が自分の側にあつて構えを直して呉れた。矢が的へ當るのではなくして我れ自らが其儘的へ突き當るやうな心持であつた。それ程緊張した態度で的に向はねばならなかつた。こりや遊び事じやないわいと思つた。老人の教へが胸へこたへてくるものがあつた。其道の術で押されるのである。私には弓術はわからないけれども、其術がとりも直さず型であるから私に感ぜられたのだと思ふ。型が迫つて來たのである。

以上種々の材料をあげて力説したが、これを歸納すれば、型は究極のもので活きたものであるといふ事になる。生き／＼したものは型といふ詞はあてはまらないかも知れないが、さればと云つて骨合とか機微とかいふ心持、そんなとりとめのないものでもない。要するに眞實とか自然とか本然とかいふ程の心持で、それではあまりに漫然としてゐるから引例のついでに「型」といふ詞を使つてしまつたのである。尙私一個の心持から云へばこれの型と稱へられた所にも心を惹かれるものがあつたからである。それは能や舞踊が、人のやる運動うごきそのもので、一瞬時に次ぎから次ぎへと移り變るものであるが、その動、それを型と言つた心持は面白いと思つたからである。

(此處で季題問題も解決が出来るが本論はそれには立入らない)

さて此の如き意味での型、この心持は、以上の引例の上でのみ存するものではなく何にでもあらゆるものに在るのである。單に自分が飯を食ふ事にも、木の枝に青い葉がついてゐる事にも、それを突き詰めれば必ず何物かにつかるのであつて、これは自分が型にするまでに突き詰めたのであるかも知れないが、要するに何物の奥にも其究極ではいつも型に出逢ふのである。嚴然と立つてゐる型である。

直接といふ事はこの究極のものに向つての謂である。(大正五、八、六)

附記。

型の話はこれで終るべきものではない。これを單に型として説くなれば、畢竟この型の型に非らざる所以、常に變移し其場合々々に異つた形態の底に存じてゐる事を、もつと力説しなければならぬ。また形而上の問題として考へるときは、古今を通じて幾萬卷となく説き著はされてゐる書簿その哲學書を一々甄別し覆校しても、それは到底盡きない問題なのである。

抽象的に考へては、自分に遠い隔つたものになつてしまふから、どうしてもこれは活きたものとして考へる。即ち自分の經驗の中に見出さねばならない。併し、吾々が或る本を読んだ場合、その書の中にも型といふ事は考へられない事はない。例へば、嵯峨日記にあらはれてゐる芭蕉の生活はわだかまりのないひろい悠々とした生活である。親しい心を許し合うた人がかはる／＼訪ねて世話してくれる楽しい生活である。しかし芭蕉自身にどこか淋しい、周圍の人々のとゞかぬ、孤獨のおもかげがうかゞはれるのである。これは芭蕉の心が周圍に折合はぬのではなく、そんな事よりもつと上にある嚴然と存在してゐる自然即ち型に芭蕉は面接してゐたからである。孤獨の芭蕉をとほして型が思はれるのである。(八月十日、校正をしながら)「ツチグモ」第十四号・大

正五年八月)